

子どものよりよい育ちをともに考える
ベネッセの情報誌

これからの幼児教育

PDF版では表紙の写真は公開しておりません。ご了承ください。

第1
特集

明日の保育につながる 振り返り

聖徳大学大学院教職研究科教授 **篠原孝子**

データ **3～5歳児家庭の読み聞かせの現状**

園内で
回覧してください

2 第1特集

明日の保育につながる振り返り



2 インタビュー
子どもの「育ち」や「思い」を振り返ることで保育の質は高まっていく
聖徳大学大学院教職研究科教授 篠原孝子

8 ケーススタディ
どうすれば、次につながる振り返りになる？
よくありがちな振り返りをもとに考える

12 事例
同僚間での振り返りを充実させ、日々の保育の質を高める
きらきら星幼稚園（福岡県・私立）



14 データから見る幼児教育

3～5歳児家庭の読み聞かせの現状

17 Reader's Voice / 編集後記

「これからの幼児教育」ウェブサイトでは
全ての記事を無料でダウンロードできます

◎過去1年間の特集テーマ

- 2014年 秋号 保育の質を高める遊びの「理解」と「援助」
- 2014年 夏号 幼児教育に求められる「遊びの質」とは何か
- 2014年 春号 集団の中で「主体性」を育むために園ができること

※本誌は最新号、バックナンバー等の追加発送は行っておりません。



<http://berd.benesse.jp/magazine/en/latest/> または で

※ここでご紹介した内容、デザインなどは変更になる場合があります。



はじめに

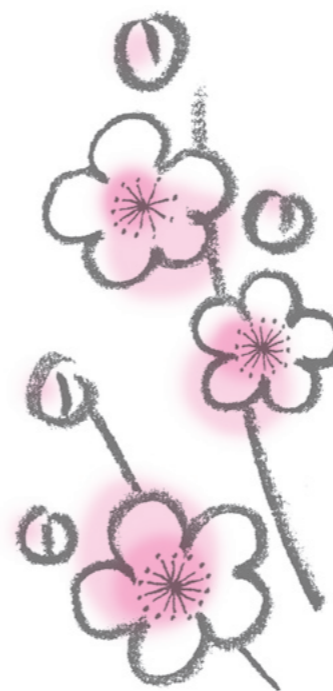
今年度も残り2カ月弱となりました。卒園・修了式の準備などを進める中で、次の1年に向けて今年度の振り返りを始めている園も多いのではないのでしょうか。

保育制度が新しくなる今、園現場では保育の質向上に向けて、日々の保育の振り返りや反省を行い、次の計画に生かしていくことがこれまで以上に求められています。

今号の特集では、一人ひとりの保育者が保育実践を評価し、明日の保育につなげていく「振り返り」のポイントを取り上げます。日々、忙しい中で、子どもの実態や思いをとらえる視点を事例をもとにご紹介します。

よりよい保育を目指していくために、日々の振り返りを少し意識するところから始めてみませんか。

「これからの幼児教育」編集長 橋村美穂子



明日の保育につながる 振り返り

子どもの実態をとらえて成果や課題を整理する「振り返り」は、保育の質を向上させるだけでなく、保育者の成長にとっても欠かせません。しかし、日々の忙しさもあり、なかなか振り返りができないという声も聞かれます。明日の保育につながる振り返りとはどのようなものかを考えていきます。

インタビュー

子どもの「育ち」や「思い」を 振り返ることで保育の質は高まっていく

振り返りを明日の保育につなげるためには、どのようなことを心がけるべきでしょうか。聖徳大学大学院教授の篠原孝子先生が、振り返りの際に押さえておきたい5つのポイントを説明します。

保育の質を高めるためには 充実した振り返りが不可欠

保育者にとって保育日誌や保育記録などによる振り返りは、日常的な営みと言えるでしょう。しかし、振り返りの内容は園や保育者によって千差万別で、保育の質の向上にうまく生かされていることも、そうではないこともあるようです。

改めて保育を振り返ることの意味を考えてみましょう。

幼稚園教育要領の第1章第1に

は、「幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする」と書かれています。この意味するところは、保育とは、保育者が一方的にするものではなく、子どもと信頼関係を築いて、一緒によりよい状態を目指して創造的につくりあげていくものだ、ということです。保育者にとっては、非常に重い意味をもつ一文と言えます。幼稚園教育要領を例示しましたが、保育所においても基本的な考え方は同じです。

こうした視点から保育について考えたとき、振り返りの重要性が見えてきます。明日の保育をよりよいも



聖徳大学大学院教職研究科教授
篠原孝子 しのはら たかこ

◎東京都公立幼稚園で31年間幼児教育に携わった経験をもつ。元文部科学省初等中等教育局幼児教育課教科調査官。共著に『3・4・5歳児の指導計画書き方サポート』（ひかりのくに）など。

全国の園長先生の声

- 保育日誌での振り返りでは、保育者によって振り返り具合に大きな差があります。振り返りの記述を増やせば保育者に負担がかかるし、少なくともすれば保育が充実しない……大きなジレンマを感じます。（岐阜県・私立幼稚園）
- 振り返りで保育の自己評価や分析を行っていますが、保育の改善につながっている実感がなかなか得られません。（大阪府・公立幼稚園）
- 日々の保育の振り返りはなかなかできず、多忙さに毎日流されています。行事のあとや、職場会議のときなど、子どもの様子を伝え合い、保育者の関わりなどに関して話し合うように努めています。（富山県・公立保育園）

※2014年秋号読者モニターアンケートより

のにするためにはまず、保育者の願いを受けて、子どもがどのような姿を見せたかを振り返る必要があります。それをもとに、子どもが抱いた思いを実現するために、明日、どのような保育を展開するべきかを考えます。つまり、充実した振り返りをしなくては、よりよい保育をつくりあげることができないのです。

振り返りの積み重ねが 保育者を大きく成長させる

具体的な場面に当てはめて考えてみましょう。

ゴムを使った製作コーナーで、子どもたちが遊んでいるとします。保育者は、「子どもが遊びに集中したのはよかったけれど、子どもにもう少し科学的な視点をもってほしい」と振り返り、課題を整理しました。この保育者は、例えば、「科学的な視点がもてるように、どのような声かけをするべきか」「科学的な視点に気づくように、どんな教材や環境を用意したらよいか」などと検討し、明日からの保育をより充実させていくでしょう。

このように振り返りは保育の質の向上に生かされるだけでなく、保育者自身が成長するためにも欠かせません。保育のねらいと、それを受けた子どもの反応を照らし合わせて振り返ることの積み重ねは、保育者を大きく成長させます。保育の本質は、一人ひとりの子どもが伸びようとする意欲や可能性を支えることです。そのために保育者ができることを見つけ出すための最良の方法こそが、振り返りと書いていいでしょう。



視点を変えて、保育を取り巻く社会状況の変化に目を向けてみましょう。2015年春から施行される予定の新制度のもと、国の子育て関連の予算が増額されると、これまで以上に保育の質が社会から求められるようになるのは自然な流れでしょう。また待機児童問題が解消に向かい、保護者の園選びの選択肢が増えれば、家からの距離など利便性に加え、保育の質も重要視されるようになるでしょう。こうした流れを考えても、保育の質の向上に欠かせない振り返りの重要性は、ますます高まってくると言ってもよいでしょう。

振り返りが難しい要因は 観点のズレや経験不足にある

次に、振り返りが保育の質向上に結びついていないケースを挙げ、課題を考えてみたいと思います。

園でよく見られるのは、「みんなで○○をして遊んだ」「○○が盛り上がりよかった」など、その日にあった事実だけを書いている振り返りです。これでは単なる記録にとどまり、子どもの育ちは見えません。

こうした振り返りになってしまう要因は、いくつか考えられます。ま

ず経験の浅い保育者に多く見られるのが、子どもの姿から育ちを読み取れなかったり、背景にある要因をとらえられなかったりするケースです。どのような育ちにつながるかが予測できないため、振り返りが浅くとどまりがちです。養成校によっては、こうした振り返りに関する学習をあまりしないことがあるため、新人や若手の保育者にとって、最初は難しいことかもしれません。

似たケースですが、遊びの中の学びの質を読み取ることが難しいこともあります。遊びの中の学びという考え方は登場して日が浅いため、あまり意識していないベテラン保育者も少なくありません。遊びの中の学びをどう読み取るかを学生のときに、十分に指導されていない場合があるという課題もあります。

遊びの中の「学び」は、「育ち」と言い換えられます。日頃から、これを意識しているかどうかは、子どもの育ちに直結する問題ですので、今後、研修などを通して園内で共通認識としていくとよいでしょう。

同じく事実ばかりの振り返りになる要因として、行事や活動に追われ、日々の保育を通した育ちが重視され



ていない場合があることも挙げられます。こうした園では、「運動会に向けて何ができたか」「制作物はどこまで進んだか」など、行事や活動の成果に注目した振り返りが見られることがあります。

ほかにも改善が求められる振り返りとして、子ども側の課題は書かれているけれど、保育者自身の振り返りが見られないケースもあります。

これは、比較的経験豊富で、保育に自信のある保育者に多く見られる傾向があります。「こういう環境を設定したら、こんな反応があるはず」といった考えが強く、その通りにならないと子どもの側に課題があるかもしれないと考えてしまうのです。

以上のような課題を踏まえ、振り返りのポイントを具体的に考えていきましょう

プ全体をひとくくりにして考えるのではなく、保育者と子ども一人ひとりの関係性に着目しましょう。実際に記録には残さなくても、子どもの名前を思い浮かべて振り返るようにするとよいでしょう。

保育中に全体の動きにばかり目が向いていると、振り返りの際に個々

の子どものイメージが浮かばないことがあります。同時に全員の気持ちを受け止めるのは不可能ですから、「今日は、特にこの5人をしっかりと見よう」などと、あらかじめ重点を置く子どもを決めておくといいでしょう。常に全体を見ようとしてしまうと、いつまでも一人ひとりへの

理解が深まらず、信頼関係が深まらないこともあります。

また、みんなで活動に取り組んでいる場面では全体を、それぞれで遊んでいるときは個々の子どもの関わりに着目するなど、状況によって見方を変化させましょう。

明日につながる振り返りの5つのポイント

1 発達のプロセスの見通しをもちながら今の姿を見る

長期的な発達のプロセスの見通しをもち、その中に目の前の子どもの姿を位置づけて振り返ることが大切です。長い目でとらえていかないと、子どもの育ちを適切に読み取れなかったり、活動中心の保育になったりする危険性があります。

本来、遊びや活動は、子どもの実態に合わせて検討するものです。「5歳だから、遊園地ごっこをやろう」などと、子どもの姿を見ずに、活動ありきで考えるのは望ましくありません。

発達のプロセスを踏まえ、例えば「5歳児には友だちとイメージを伝え合い、ともに遊ぶ楽しさを知ってほしい」といった保育者の願いが実現できる活動を検討し、その結果として出てきた案が「遊園地ごっこ」だったとしたら、それは自然な流れと言えます。そのように子どもの実態把握に基づいた保育者の願いがはっきりとしていれば、振り返りの観点も明確になるでしょう。

発達のプロセスは、園内で共通理

解を進めるとともに、長期計画や指導計画に反映させると、若い保育者も参考にしやすくなります。



を表すことができず、Bくんが理解してくれるのを待っていた状態かもしれない。仮にそうだと見取ったら、Aくんが言葉で気持ちを伝えられるように橋渡しをする援助が、明日の保育では望まれるかもしれません。

信頼関係が十分かを確認するためにも、振り返りではクラスやグルー

4 前向きな振り返りをしよう

振り返りをしていると、どうしても課題に目が向きやすくなります。もちろん、よりよい保育をつくりあげるためには課題をクリアしていく必要はあります。しかし、日々、しっかりと子どもに向き合っていれば、課題だけではなく、喜ばしい育ちもたくさん目に入るはずですよ。

ですので、マイナス面ばかりを見ずに、「楽しかったこと」や「できるようになったこと」など、子どものよさをさらに伸ばすような振り返りも心がけましょう。

園長先生や管理職の先生が、若手の保育者にアドバイスをするときには、「今日、楽しかったことは何？」

「誰が特に楽しそうだった?」「どうして楽しかったのだと思う?」「もっとほかの子どもも楽しくなるためには?」などと、思考がどんどん前向きになるような質問を投げかけるとよいでしょう。

5 ひとりで悩まず、みんなで深め合おう

経験の浅い保育者が、初めから深い振り返りを書くのは難しいでしょう。また、ベテランであっても、学ぶ機会がなければ、なかなか意識は変わらないものです。

保育者が気軽に相談し合ったり、話し合ったりできる雰囲気が園内にあると、園全体の保育の質が高まりやすくなります。特に若手の保育者は援助の引き出しが少なく、子どもの課題が見えても、どうすればよいかかわからずに悩むことがよくありま

す。そんなとき、同僚が自然とアドバイスできるような雰囲気をつくりたいものです。

みんなが集まれる場所に、お茶やお菓子などを置いてリラックスできる環境をつくれれば、そのような雰囲気が生まれやすくなるでしょう。また、園長先生や管理職の先生は、指導するというより、一緒に考えるという姿勢を心がけるとよいでしょう。



現場のみなさんへ

保育は最初から形があるわけではなく、子どもと一緒に、日々、成長させていくものだと考えられます。保育とは「生き物」であると、つくづく思います。

子どもは自ら伸びる可能性を秘めた存在です。私たちは、そのことを信じることから出発し、どうすれば成長を支えることができるかを考え続けたいですね。そして、子どもを核として、保育者も成長していきます。そのための最初の一步は、自分の保育を振り返ることだと考えています。

計画の視点から よりよい振り返りを考える

さらに振り返りを深めていくためには、どのような視点が求められるでしょうか。篠原先生の監修のもと、編集部がご提案します。

計画と振り返りは 表裏一体の関係にある

週の振り返りに必要な思考の流れの一例を図1示したのが次ページにある図1です。各園で振り返りのフォーマットは異なると思いますが、振り返りの視点を確認するものとして参考にいただければと思います。

図は、大きく分けて「計画」と「振り返り」で構成されていることにお気づきかと思えます。これは、計画と振り返りはまさに表裏一体の関係にあり、分けて考えることはできないからです。振り返りとは、必ず、計画を踏まえて行われるものなのです。

思考の流れをAから順番にたどっていきましょう。

最初の【A】子どもの姿（実態）には、目の前の子どもの育ちや思い、状態、興味・関心などから重要と思われるものを記入します。次に、そうした姿が見られる理由や要因が、【B】子どもの姿の背景（保育者の読み取り）に入ります。

前週もしっかりと振り返りができていれば、【A】と【B】は書きやすいでしょう。なぜなら、前週の【G】振り返りの内容が、この【A】【B】の参考になるからです。そのように計画と振り返りは、常に連続しているのです。

次に、【A】【B】の内容を踏まえ、【C】週のねらいを検討します。子どもの願いや思い、興味・関心などを生かして、どのような育ちを実現したいかを書きましょう。目先の成長にとらわれず、長期的な発達を念頭に置くことが大切です。

続いて【C】を達成するための具体的な体験を、【D】ねらいを実現するための体験や内容に記入します。ここは、長期の指導計画とも関連しますが、いかに目の前の子どもの実態を踏まえて設定するかが、子どもの育ちを促すポイントと言えるでしょう。

【E】保育者の援助は、【D】を実現するための援助の内容で、【A】を踏まえて検討します。できるだけ具体的に書くことが大切で、援助方法の引き出しの多さが問われる項目でもあります。

的確に振り返ることで 明日の計画が充実する

ここから「振り返り」のプロセスに入ります。【F】振り返りの観点は、【C】と【E】を連動させて、どのような姿が見られたら、ねらいが達成されたと言えるかを予測して書きます。非常に重要な項目で、ここが明確になっていなければ、ねらいを踏まえた振り返りができず、「計画」と「振り返り」の連続性が絶たれてしまいます。

観点は、できるだけ具体的に書くことが望ましいのですが、その内容は保育者の経験値によって大きく左右されます。というのは、経験が浅いと、ねらいが達成された状態が、どのような子どもの姿として表れるかが具体的にイメージできず、どうしても抽象的な内容になってしまいやすいからです。逆に経験が豊富なほど、子どもの姿が想像できるため、観点が具体的で豊かな表現となります。

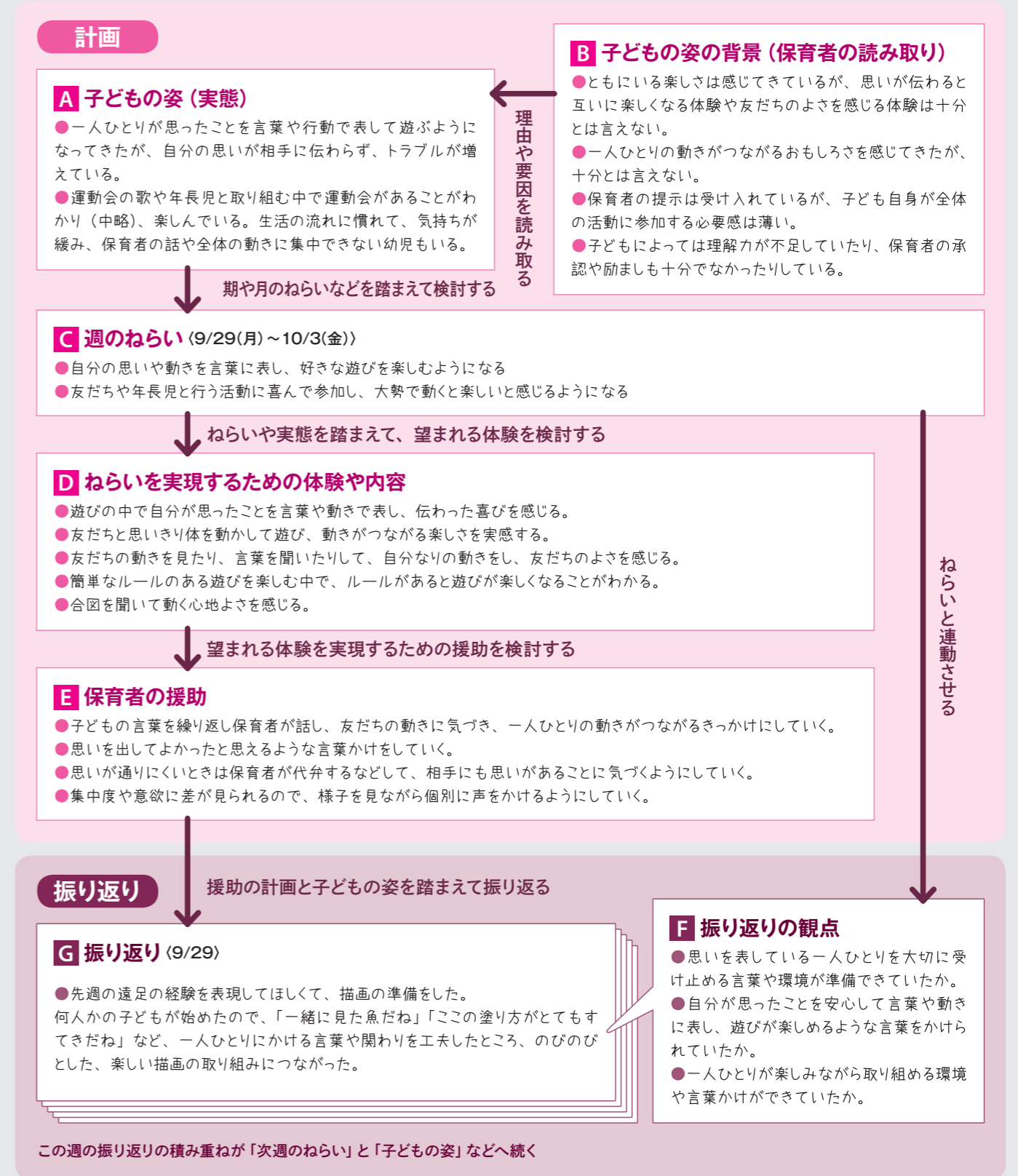
観点がなかなか思い浮かばなければ、最初は【C】とほとんど同じ内容で構いません。子どもの姿の視点からだけでなく、保育者の援助がどうだったかという視点でも振り返るとさらに効果的です。

そして、保育が終わったあと、【G】振り返りの内容を検討します。【F】から、その日の子どもの姿を振り返りましょう。子どもの言動にとどまらず、自分の援助が子どもの育ちにどのような影響を与えたかを謙虚な姿勢で振り返ってください。【G】の内容が事実だけになってしまうと、今後の「計画」に結びつきにくくなります。

ここまで振り返りの基本的な流れについて説明しましたが、新人や若手の保育者にとっては、少々ハードルが高いかもしれません。単に記入欄を埋めようとする負担が大きいものです。それぞれの意味が理解できるように園長先生や管理職の先生が説明するとよいでしょう。

図1 振り返りに必要な思考の流れの一例（4歳児クラス・9～10月） 東京都品川区・城南幼稚園 金子理奈先生の週日案を参考に作成

以下の内容は振り返りをするために必要なPDCAサイクルの流れの一例であり、実際の計画や振り返りは各園の特性を生かして取り組んでください。



上記の週日案の手書き実例をWEBで公開中！
詳しくはベネッセ教育総合研究所HPをご覧ください。<http://berd.benesse.jp/magazine/en/>

ケーススタディ

どうすれば、次につながる振り返りになる？ よくありがちな振り返りをもとに考える

振り返りをしているのに、なかなか保育の質が高まらないと感じることはありませんか。
課題が見られる振り返りを例にとり、
篠原先生とベネッセ教育総合研究所・磯部頼子顧問が改善に向けた視点を提示します。

表面的な状況の読み取りにとどまっているケース

経験の浅い保育者にありがちなのが、表面的な状況の読み取りにとどまった振り返りです。
どのような視点を取り入れたら、充実した振り返りとなるのでしょうか。

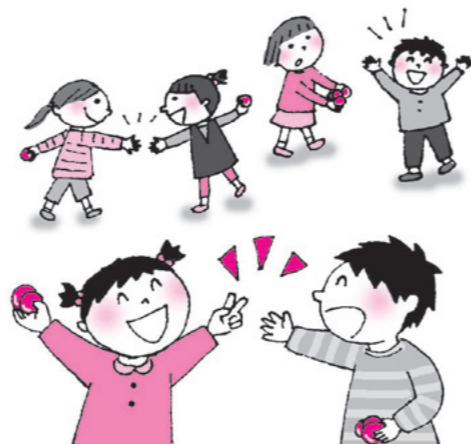
ある日の保育中の様子(9月下旬)

◎5歳児が金貨取りゲームで大盛り上がり

運動会を間近に控えた9月下旬、5歳児の子どもたちが、じゃんけんをして勝ったら相手の金貨がもらえるゲームをしました。ゲームは、5人ずつの5グループ対抗で行われ、グループで集めた金貨の数を競いました。すでに何度か体験していたため、子どもたちはルールをきちんと守り、次々と相手を探して楽しんでいました。あちこちで「やったー!」「負けちゃった!」といった楽しそうな声が上がりました。

◎個人とグループの成果を混同する子どもも……

金貨がどんどん増えていくグループもあれば、なかなか増えないグループもありました。最後に金貨を数え、1位から5位を決めました。1位のグループは大喜びしていましたが、ほかのグループの子どもたちは不満そうな表情を見せていました。また、「自分はこんなに集めたから1位だ」と、個人とグループの成果を混同している姿も見られました。



その日の振り返り

この日の ねらい

- グループの友だちと力を出し合ってゲームを楽しむ。
- ルールを守って遊ぶ。

振り返りの 観点

- グループの友だちと力を合わせて取り組んでいたか。
- ルールを守って遊べていたか。

振り返り

- ①「ほかのグループの友だちとじゃんけんをして負けると金貨を渡す」というルールは、みんなが守れていた。
- ②あるグループでは「自分が〇個取って一番多い!」と主張し合い、グループの共通の成果という意識になっていなかった。
- ③1位になれなかったグループは、楽しかったという気持ちや満足は得られなかった。

事実だけを書かずに背景にある育ちや学び、思いを読み取ろう

ねらいを具体的にすると 振り返りの観点がシャープに

篠原 振り返りの前段階であるねらいが、少し曖昧な印象を受けました。想像ですが、運動会が近い時期なので友だちと協力して競争するおもしろさを感じ、仲間意識や役割意識をもってほしかったのではないのでしょうか。そのあたりをもう少し詳しく書くと、振り返りの観点がシャープになり、また、発達のプロセスの見通しをもったねらいになるはずです。さらに、1日の振り返りなのに、ひとつの活動しか言及されていないことも気になります。

磯部 子どもの姿より、保育者が設定する活動を優先してしまっていたのかもしれない。

篠原 登園してから降園するまで、いろいろな姿が見られるのに、その日の主活動だけに着目し、ほかの生活や遊びの場面を振り返らないというケースは、割とよく見られます。子どもは一部の活動だけで育つわけではありませんから、重点を置く子どもやほかにも注目したい活動を決めておくなどして振り返りをする必要があるでしょう。

遊びの中でどういった成長や学びがあったかを掘り下げて読み取る

篠原 子どもの様子だけしか書かれていないのも、残念ですね。子どもの行動の背景にある思いや願いを読み取るとともに、もっと育ちを促すためには、どのような援助が必

要かを考えたいところです。

磯部 そうですね。ルールは単純ですが、負けたら悔しさを抑えて金貨を渡さなければならないなど、子どもの育ちが表れやすいゲームでもあります。子どもの姿から育ちや課題を読み取れば、次の援助が自然と見えてくるでしょう。

例えば、振り返り①では、「みんなが守れていた」と書かれています。もしかしたら、前回は悔しくて金貨を渡せなかった子どもがいたかもしれません。その場合、ルールが守れるようになった背景には、どのような成長や学びがあったかを掘り下げると、「まだ課題が見られる子どもには、こういう援助をしよう」といったアイデアが生まれます。

篠原 「ルールが守れた」で終わらずに、さらなる成長を見据えることが大切です。振り返り②から、協同したことによる成果を感じられていない子どもがいることがわかりますが、振り返りでは「それはどうしてか」「今後どうするか」といった視点で検討する必要があります。「ど

うして、そこまで自分が1番であることにこだわるのだろうか」と考えることがきっかけとなって、日常の保育のあり方を見直すことにつながるかもしれません。

磯部 振り返り③では、1位ではないグループは不満のまま遊びを終えました。こちらについても、もっと理由や対策を検討した方がいいでしょう。

篠原 次への意欲をどう生み出すかは、保育において非常に重要なテーマです。その点を踏まえて振り返るといいと思います。

磯部 例えば、負けたグループには「あと〇個ずつ取れたら、1位だったね」といった声をかければ、意欲が高まるかもしれません。

篠原 そういった援助があれば、目的が具体的にありそうですね。この時期は、みんなで共通して目的に向かう気持ちを育てることが大切です。そうした気持ちを支える援助について、振り返りを通して考えると、翌日以降の保育につながるのではないかと思います。



表面的な感想で終わり、課題に踏み込めていないケース

感想で終わってしまうような振り返りも、次の保育につながらないことがあります。
もう一步踏み込むことで次の保育につながりやすくなるでしょう。

ある日の保育中の様子(10月下旬)

◎盛り上がり欠けたお茶会ごっこ

登園後の自由遊びの時間には、5歳児の子どもたちはグループに分かれて、いろいろな遊びをしていました。

A・B・Cの3人は登園後すぐにウサギの世話をし、砂場や製作コーナーに向かいました。

D・E・F・Gの女児4人は、お茶会ごっこをしました。Dが中心となり、自分でお茶をたてたり、客に運んだり、遊びを取り仕切っていました。ほかの子どもにも関わってほしいと考えた保育者が客として参加すると、ほかの子どもも客になりました。しかし、最後まで子ども同士の会話はあまり見られませんでした。

◎リレー遊びの途中に仲直りが発生

男児6人は運動会を意識して、リレーを始めました。最初は盛り上がりでしたが、何度か遊ぶうちに、HとIが言い合いを始めました。その場を離れていた保育者は原因を推測し、人数の調整やルールの確認をしました。しかし、仲直りはできず、リレーをやめてしまいました。



その日の振り返り

この日の ねらい

- 友だちに自分の考えを伝えたり、相手の思いを受け止めたりするなど、互いに認め合いながら遊びを進める楽しさを味わう。
- 運動会に期待をもって友だちと体を動かしたり、太鼓をたたいたりすることを楽しむ。

振り返りの 観点

- 友だちと相談して遊びを楽しめるような保育者の援助ができていたか。
- 運動会を意識して、体を動かしたり太鼓をたたいたりできるような環境構成や活動内容になっていたか。

振り返り

- 「A・B・Cの3人は登園するとすぐにウサギの世話を始めた。それが終わると、AとCは砂場に、Bは製作コーナーに行き、それぞれ遊んだ。自分のしたいことは、わかっている。
- D・E・F・Gの女児4人は、敬老の日に体験した「お茶会」をイメージして、お茶会ごっこを始めた。Dが中心となって遊びを進めていたが、会話は見られなかった。保育者が客になると、E・Fは猫として客になった。客が増えてDは張りきっていた。これまでの経験が遊びに生かされていた。
- 男児6人が園庭で折り返しリレーを始めた。自分たちで折り返し地点のコーンや得点板を用意し、組分けをした。途中でHがIに「ずるい」と抗議したので、間に入って人数の調整やルールの確認をしたが、Hはリレーをやめてしまい、ほかの子どもも抜け、別の遊びを始めた。せっかく自分たちで始めた遊びなのに、どうして続かなかったのだろうか。人数調整やルールの確認をしたのに……。

感想から一步踏み込んで援助の成果や課題を謙虚に振り返る

「感想」にとどまらず 原因を追究する姿勢を

篠原 最初にねらいに関してふれると、この日のねらいとしては要素を盛り込み過ぎだと感じます。もう少し絞って重点を置いた方がよいでしょう。これが週のねらいであれば、あまり問題はないのですが。

磯部 確かに要素が多いですね。そのため、振り返りの観点も大きくなってしまっています。もう少しねらいを具体的に書くと、子どもの姿が読み取りやすくなるでしょう。

篠原 この振り返りのよいところは、保育者自身の関わりや気持ちが具体的に書かれていることです。こうした内容があると、次の保育につながりやすくなります。

磯部 そうですね。ただし、「感想」というレベルにとどまっているのは残念です。

篠原 重点を置いて見た子どもの名前を挙げていて、全体的に状況説明が細かく、エピソード記録のような内容ですが、それ自体は悪くありません。ただ、もう少し深く踏み込めるといいですね。例えば、**振り返り③**から、リレーが続かなかったことを残念に思い、悩んでいる様子が見えかけます。ここで、**どうして続かなかったのかを追究する姿勢がある**と、次に生かしやすくなるでしょう。

人数やルールについてフォローしていますが、それでもやめてしまったのですから、何らかの原因があったはずだと思います。これは振り返りに書か

なくてもよいですが、こういう場合は先輩保育者などに相談すると、ヒントをもらえることが多いものです。

自分の援助に対する 振り返りも重要

磯部 振り返り②のエピソードは、「これまでの経験が遊びに生かされていた」と、よかった事例として書かれていますが、Dちゃん以外の子どもがどのような動きをしていたのか、役割分担をしようとしていたのか、といった視点から全員の気持ちを読み取り、Dちゃんに助言できるとよかったと思います。

篠原 Dちゃんがふだんはおとなしい子どもだとしたら、今回、中心的に動いているのを尊重してもいいでしょう。逆に、いつもひとりで遊びを進めてしまうような場合は、もっとほかの子どもを役割を考えられるように援助したいところです。

この日のねらいとして、考えや思いを伝え合ったり、認め合ったりす

ることを味わわせたいと書かれています。ところが、ねらいを達成させるような援助はあまり見られません。Dちゃんに対して、猫になったふたりの気持ちを、どう伝えるかがポイントだったのではないのでしょうか。そのあたりの援助について十分に振り返りたいところです。

磯部 ところどころ課題は見られるものの、ねらいを達成できている場面も見られますね。

篠原 そうですね。子どもの動きをきちんととらえているのですから、自分の援助に対して、**観点を踏まえた振り返りがあると、よりよかった**と思います。例えば、運動会を意識させるというねらいは、子どもが自発的にリレーをする姿からも達成されていると言えます。逆に、気持ちを伝え合えなかった姿も見られますから、その点に関しては謙虚な姿勢で振り返るといいと思います。そのように成果や課題を整理できると、気持ちを切り替えて明日の保育に向かえるでしょう。



事例 同僚間での振り返りを充実させ、日々の保育の質を高める

きらきら星幼稚園（福岡県・私立）

それぞれの園の状況によって保育の振り返りの方法はさまざまです。きらきら星幼稚園では、保育観やキャリアの違いを尊重した保育者同士の自由な語り合いを重視する過程で、統一された書類の活用をとりやめ、一人ひとりが考えやすい形での振り返りに変えていきました。

大切なのは保育の「主観」をみかく対話の場をつくること

本園では、保育の日常的な振り返りは、毎週金曜日のカリキュラム会議で行っています。学年ごとに保育者が集まり、その週の課題を洗い出し、次週の活動内容と留意点を確認していきます。

以前、このカリキュラム会議では「週案」と呼ばれる保育記録を使用していました（図2参照）。本園は創立36年を迎えましたが、この週案は4度目の改訂を経てできたものです。つまり、保育者や子どもたちの状況を見ながら、より使いやすい様式へと見直しを図ってきたわけです。

しかし、ある頃から、統一した様式で振り返りを行うことで、保育者一人ひとりの保育観、個性が表出されにくくなっていると感じるようになり

なりました。園における振り返りは、目の前の子どもたちをとらえ、明日の保育に直接生かしていくためのものであり、記録し、管理職のチェックを受けることが目的ではありません。

私は、保育で大切なのは保育者の主観、保育観だと考えています。もちろん、ここでの主観は自分勝手な感覚のことではありません。保育をつかっていくためには、自分の保育観を同僚に提示し、具体的な保育の形として説明することが大切です。保育者が自らの保育観をみかき、同僚に示していくには、ひとつの型にはまった振り返りにこだわる必要はないと考えたのです。

そこでここ数年、園では週案の書式を使う代わりに、保育者一人ひとりがノートを用意し、話し合いの中で気づいたことや感じたことを自由に書きとめて、振り返りを行っています。新任の保育者には週案を参考に、振り返りをもとに次週のカリキュラムを精査するPDCAサイクルの視点を説明しますが、週案の書式自体を使うことは求めていません。

園、学年としてのねらいは同じでも、その実現に向けて、自分の保育を展開してもらいたいし、自分が一



きらきら星幼稚園 園長 黒田秀樹先生

番考えやすい形で保育を振り返ってもらいたいと私は思っています。そうでなければ、多忙な現場で振り返りはいつか形骸化し、保育も停滞してしまいます。

保育者の主体性を信じ、保育の質を高める

金曜日のカリキュラム会議は、お菓子を食べながらリラックスした雰囲気で行われています。雑談のように自由に、ときにそれぞれの保育観をぶつけ合いながら、よりよい保育を対話の中で作りあげていくことができていると感じます。多忙な保育者に、事前に振り返りの内容をまとめることも求めません。熱が入れば何時間も話し合いを続ける保育者に対する信頼があるからです。もちろん、学年の中心となる力量ある学年主任の存在も大きいです。

とはいえ、園長として一人ひとりの保育者が今どんなことを考えてい

るのか、知りたい気持ちもあります。そこで保育者と園長をつないでくれるのが「交換ノート」です。それぞれの保育者が、心に残ったエピソードや今の自分の気持ちを自由に綴り、私がそれに感想を加えます。子どもを見る目がどれだけ豊かになっているかなど、保育者の成長が確認できるものになっています。これも保育の振り返りの機会のひとつです。

交換ノートは強制ではないので、月に数回書く保育者もいれば、2カ月に一度くらいのペースで書く保育者もいます。それでもまったく書かない保育者はいません。それは、書くことを強制していないからだとは思っています。強制されると内容が単なる報告になり、読んでもきつとつまらないものになるはず。そして、私の「つまらないなあ」という気持ちは保育者に伝わってしまいます。

今、交換ノートの内容はどれもとてもおもしろく、いつも心待ちにしています。保育者の主体性を信じ、気軽なコミュニケーションの場をつくるのが、振り返りを充実させ、園全体の保育の質の向上につながっていると思います。

保育の現場で働く人たちは、ちょっとした雑談のときも、いつも子どものことを話しています。そして一見おしゃべりのようなリラックスした雰囲気です。保育の核心を突くような言葉が飛び出してくるものです。保育観やキャリアの違いを認めながら、型にはまらず、自由に子どもについて語り合うことが最も大切なのだと思います。

保育者の声



5歳児担当 下湯湯智佳先生

ほかの先生の考えも知ることで保育に余裕が生まれる

毎週金曜日のカリキュラム会議では、園長先生が用意してくれたお菓子を食べながら、その週の振り返りを行っています。1週間の中で一番保育について話ができる時間で、同じねらいの活動でもクラスごとに内容が違うこともあるので勉強になります。次週に生かせる具体的なアドバイスをもらうことも多いです。

例えば、運動会のリレーでは子ども自身で走る順番を決めますが、どういう順番だと勝てるか、アイデアがなかなか出てこないチームもあります。行き詰まっているようにも見える子どもたちに、アドバイスするか、それとも見守るか迷っていることをカリキュラム会議で話したところ、「順番の変え方を教えてあげることで、子どもたちが自分で工夫できるようになる



下湯湯先生のノートより

かも」「秘密の作戦会議をしようと思いをかければ、子どもたちの気持ちが盛り上がるのでは？」などとアドバイスをもらいました。ほかの先生の考えを聞くことで、子どもを見る視野が広がり、気持ちが楽になった気がしました。

園長先生と感動を共有できるのがうれしい

私たちの毎日は確かに忙しく、じっくり保育を振り返る時間はカリキュラム会議以外にはなかなか取れません。だからこそ、掃除の時間など、ちょっとした時間でのほかの先生との雑談を大切にしています。遠足などの大きな行事が続いているとき、「子どもたちも興奮して、生活にちょっと落ち着きがなくなっているね」「わらべうたの時間を少し多めに、気持ちを落ち着かせようか」など、そのときそのときに気がついたことを話し、日々の保育へとつなげています。

園長先生との交換ノートを書くのは、月に1回くらいです。感動したこと、おもしろいと思ったことがあったとき書いています。わかりやすいように、写真を貼って伝えることもあります。書くことで自分の考えや気持ちが整理できますし、保護者のかたにエピソードをお話するときも上手に伝えられるようになります。

園長先生も交換ノートを楽しみにしてくださっているようで、間が空くと「そろそろ下湯湯先生のノートが読みたいなあ」とおっしゃるんです。私が紹介したエピソードを園長先生が園だよりで紹介してくださったときは、「園長先生も感動してくれたんだ!」と、うれしくなります。

きらきら星幼稚園

○「子どもが子どもの時間をいっぱい呼吸できる園づくり」を目指し、わらべうたや絵本を通した幼児期にふさわしい感性の教育、自然の中での体験を大切に保育を展開している。

園長 黒田秀樹先生
所在地 福岡県行橋市矢留810
園児数 280人(3~5歳児)



図2 4度の改訂を経て数年前まで使用されていた週案

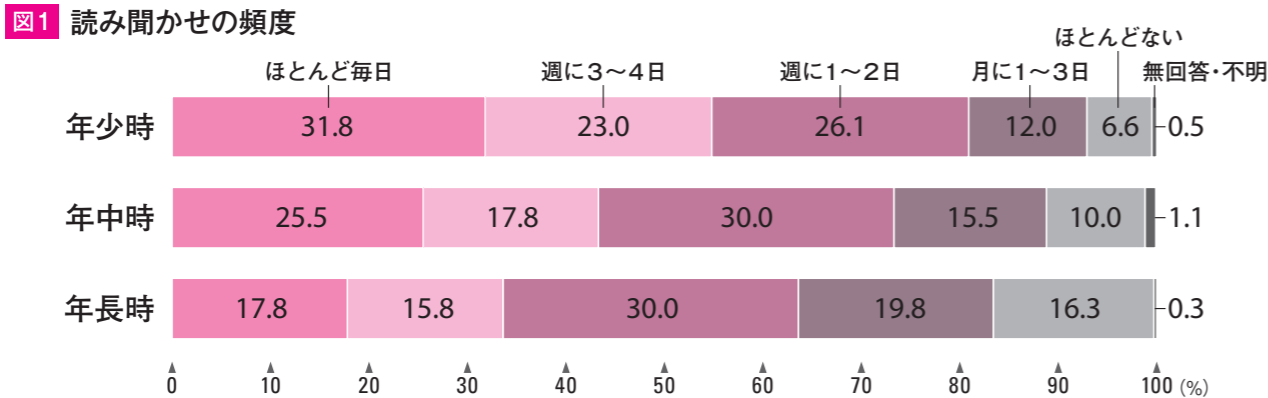
3～5歳児家庭の 読み聞かせの現状

ベネッセ教育総合研究所は、全国の約1,000人の保護者を対象に、「子どもの学びの芽生えと母親の関わり、小学校に向けての意識」に関して3年間の縦断調査（追跡調査）を行いました。今回は、この調査の中から、読み聞かせに関するデータを中心に紹介します。園から家庭への情報提供の材料のひとつとして、ぜひご活用ください。

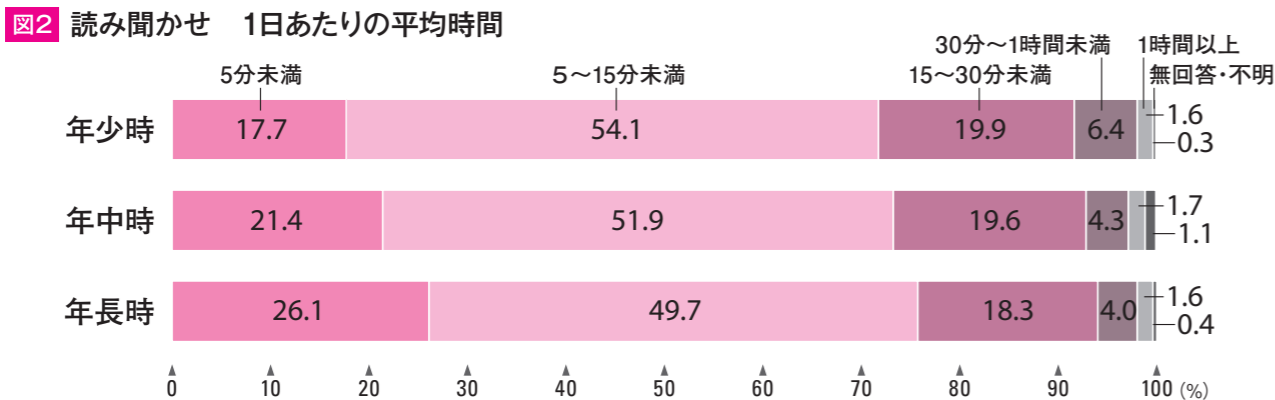
引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用される際には、調査名称を記載してください（例：ベネッセ教育総合研究所「幼児期から小学1年生の家庭教育調査・縦断調査（3歳児～5歳児）」（2014））。

成長するにつれ、 読み聞かせ頻度も時間も減っていく

Q あなたは日頃、どれくらいの頻度でお子さまに絵本や本の読み聞かせをしていますか。（あてはまる番号1つに○）



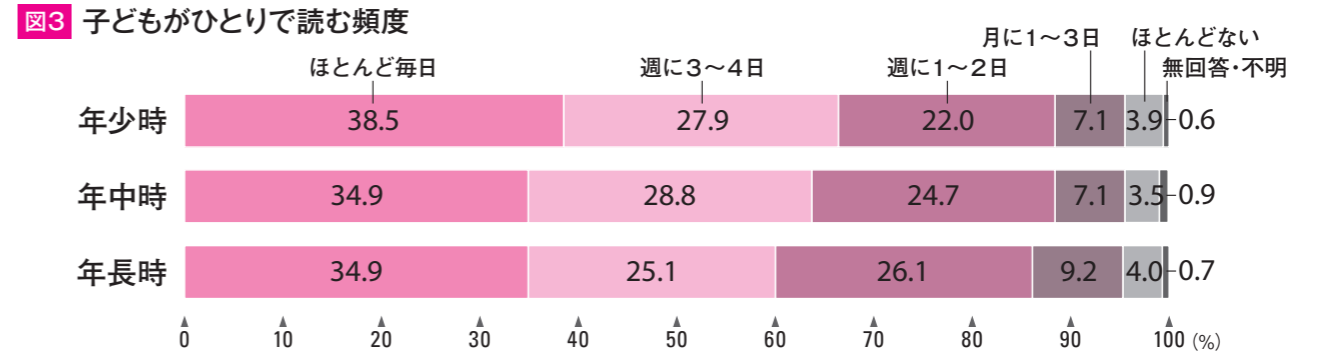
Q あなたは先週1週間の中で、1日平均、どれくらい読み聞かせをしていましたか。（あてはまる番号1つに○）



※読み聞かせをしている人のみ。

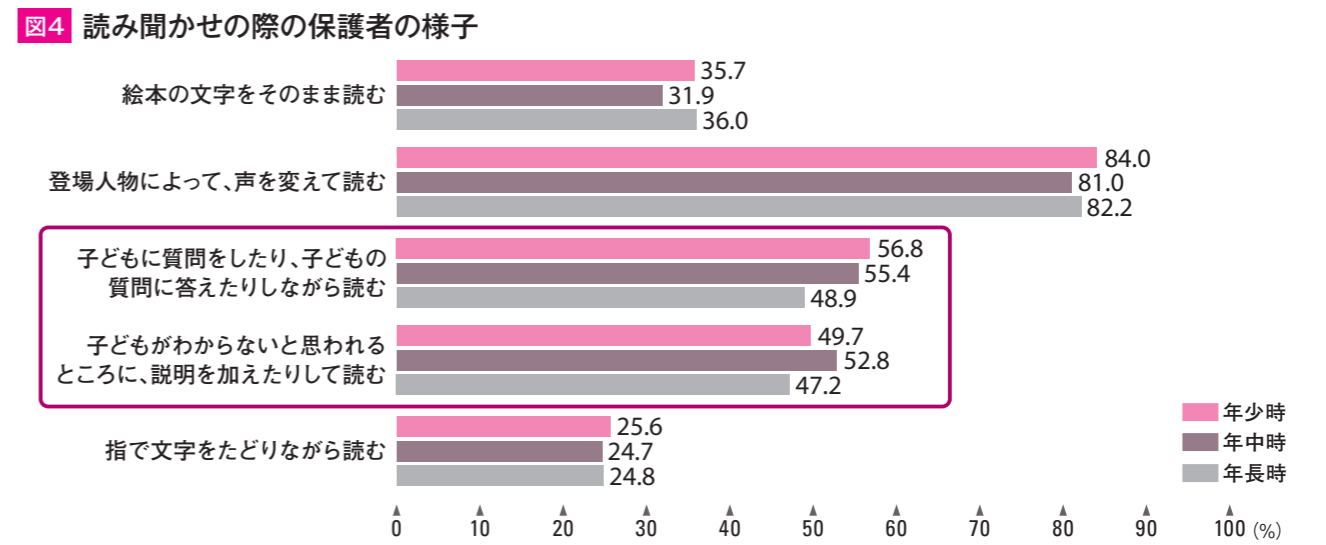
約3～4割の子どもがほとんど毎日、 ひとりで絵本や本を読んでいる

Q お子さまがひとりで絵本や本を読む（見る）ことはどれくらいありますか。



質問に答えたり、説明を加えるなど、子どもの様子に 応じながら読み聞かせをしている人は約半数

Q 読み聞かせのときのあなたの様子を教えてください。（あてはまる番号すべてに○）



※読み聞かせをしている人のみ。

出典：「幼児期から小学1年生の家庭教育調査・縦断調査（3歳児～5歳児）」（2014）
調査対象：年少時から小学1年生までの継続調査に同意した母親
有効回答数：1,077人

調査時期：2012年1・2月～2014年1月 調査地域：全国
調査方法：郵送法（自記式アンケートを郵送により配布・回収）
調査項目：子どもの生活時間／子どもの学びのレディネス／母親の関わり／母親の教育観／園・小学校の満足度など

研究員解説

図1は絵本や本の読み聞かせ頻度について聞いたものです。「ほとんど毎日」している割合は、年少31.8%、年中25.5%、年長17.8%でした。子どもの年齢が上がるにつれて読み聞かせの頻度は少なくなっていきます。図2は、読み聞かせをしている人に対して、1日あたりの平均時間を聞いています。「5分未満」は年少17.7%、年中21.4%、年長26.1%と増加しており、1日あたりの読み聞かせの時間も、年齢が

上がるにつれて短くなっていく様子が見られました。図3は、子どもがひとりで読む頻度について聞いたものです。年齢に関わらず、約3～4割の子どもがほとんど毎日ひとりで絵本などを読んでいます。図4は、読み聞かせのときのおうちのかたの様子について聞いたものです。おうちのかたの読み方は、子どもの年齢が変わっても大きな差は見られませんでした。



高岡純子◎ベネッセ教育総合研究所次世代育成研究室室長。妊娠・出産や子育てなど就学前の家庭を対象とする調査研究に携わる。

幼児期ならではの読み聞かせの楽しさを 園だよりなどで保護者に発信を



年齢が上がるにつれて読み聞かせの頻度や平均時間が減る中、家庭での読み聞かせを活発にするために、園ができる支援はどのようなものが考えられるでしょうか。東京大学大学院教育学研究科教授の秋田喜代美先生にうかがいました。

東京大学大学院教育学研究科教授

秋田 喜代美

あきた・きよみ

日本保育学会会長。専門は保育学、発達心理学、教育心理学、教師心理学。著書に、『保育の温もり』『保育のおもむき』（いずれもひかりのくに）など。

文字が読める年長児にも 年齢相応の読み聞かせを

読み聞かせの頻度や1日あたりの平均時間が減る理由として、幼児期になると園で絵本の読み聞かせをしてもらう機会が増えるため、乳児期のように家庭で読み聞かせの時間を設けなくてもよいと考える保護者が増えている可能性が考えられます。

年齢が上がるにつれて子どもが文字を読めるようになると、もう読み聞かせはしなくてもいいと思う保護者がいらっしゃるのかもしれませんが。ただ、文字が読めるようになっても継続して読み聞かせをすることは、非常に大切です。読み聞かせは、読んでいる人や聞いている仲間と絵本の世界を共有することができ、絵本を読んでもらうプロセスに楽しさを感じられるからです。

特に幼児になると、絵本の世界をさらに深く楽しめるようになります。場面の間のつながりが理解できるようになるので、次の展開を予想してわくわくします。同じ本を繰り返し読んでもらうことで、好きなフレーズを見つけたり、絵を丁寧に見て新しい発見をしたりする楽しさも知ることができるでしょう。また、5歳児になるとシリーズものも好むようになります。ひとつの作品を通じて得られた情報をもとに、「次はきっとこんな展開になるんじゃないか」と推測して楽しめるようになるからです。この時期にふさわしい読み聞かせがあるということ、保護者にも伝えてほしいと思います。

幼児期だから、絵本を通して文字を学ばせよう、内容を理解させようとする必要はありません。文字を読む、語い力がつくというのは副次

的な効果でしかないからです。年長になると子どもからの質問が減りますが（図省略）、それは自分で予測したり、お話の世界の余韻を楽しむようになってきたからです。保護者からの質問も減少傾向にあります（図4）、子どもが何か発見したときに一緒に喜び、「もっと続きを聞かせて」といった子どもの声を引き出すような応答性が、保育者にも保護者にも求められています。

読み聞かせシーンを撮影し 楽しそうな様子を紹介

読み聞かせの重要性を保護者に伝えるために、今回のようなデータを保護者にそのまま紹介するのもひとつの方法ですが、子どもが読み聞かせを楽しんでいる場面を視覚的に伝えることも効果的だと思います。

例えば、園での読み聞かせのシーンを写真に撮って、掲示してみてもいかがでしょうか。子どもの真剣な表情や楽しそうな様子が伝われば、家庭でも継続して本を読むきっかけになると思います。また、子どもに人気の本を園だよりで紹介したり、保育室に展示したりするのもよいでしょう。保護者に園で読み聞かせをしてもらう機会を設け、子どもたちの表情を感じてもらうのもよいかもしれません。保育者が当たり前だと思って実践されていることを、ぜひ保護者とも共有し、読み聞かせの輪を広げていただきたいですね。



Reader's Voice

2014年秋号・第1特集「保育の質を高める遊びの『理解』と『援助』」、 第2特集「『保育の専門性』を生かした保護者支援」へのご意見

このコーナーでは、編集部寄せられた読者の先生がたからのご意見をご紹介します。

*『これからの幼児教育』のバックナンバーは、「ベネッセ教育総合研究所」のウェブサイト (<http://berd.benesse.jp/>) でご覧いただけます。

- ◎「生涯にわたり学ぶ力の土台が、遊びを通して形成される」。このことを保育者自身が、子どもの姿、子どもの遊びから読み取り、自分の言葉で語れるようになることが大切だと思います。私たちが子どもと日々、繰り返し広げている遊びは、こんなに豊かで、こんな学びがあるのだと、自信をもって言えるようになりたいと思いました。「遊びの意味を読み取る視点」と『理解』から『援助』につなぐための記録の視点」は具体的でよくわかり、すぐに取り入れたいと思いました。(愛知県・公立保育園)
- ◎私たちは子どもの遊びについて、それが何らかの発達や成長のためになるようにという思いから、つい1から10までお膳立てしがちです。子どもが自発的に遊んでいるときには、見守っていていいのだという意見は私にとって大きな学びでした。(熊本県・その他保育所)
- ◎同僚との間に「今日はうまくいかなかったなあ」と愚痴を言える関係があればという意見には、強く共感しました。ささいなつづやきも受け入れ合える職場であれば、アクシデントへの対応も迅速になるでしょう。(北海道・私立幼稚園)
- ◎新卒で採用した保育者が、日々の業務の中で主任や園長とのコミュニケーションがうまく取れず、保護者の対応がその個人の技量に大きく左右されることが起きてい

- ました。第2特集の記事を回覧することで、日々のコミュニケーションが取りやすくなったとともに、共通の認識をもてるようになりました。(神奈川県・私立幼稚園)
- ◎第2特集で、全ての保護者は「その子の親でありたいと願っている」「親としての力をもっている」と明言されていて、救われた思いがしました。保育者の職務は厳しく、多忙ではありますが、保護者が変わったから保育が大変になったのではなく、育児や保育は本来大変な取り組みだということを、基本認識に据えることが大事だと思いました。(北海道・私立保育園)
- ◎現場では「子どもはかわいいけれど、保護者が…」という言葉も聞きます。そのため、第2特集のように具体的な事例を出して解説して下さるのは参考になりました。保育の専門家だからこそできる保護者支援があることを、改めて知らされました。さらに「保育の専門性」を高めていきたいと思います。(群馬県・私立幼稚園)
- ◎これまではついトップダウンになりがちで、保育者全員の意見を聞いていても、園長が提案したことが決定事項になり、意見を求めても下を向いてしまう保育者もいました。特別企画を参考に、ワークショップ型の園内研修を始めてからは、それらがなくなったように思います。(愛知県・認定こども園)

子どもは未来

ベネッセ教育総合研究所は、
子どもたちの成長に寄り添う研究と
社会への発信を通して、
一人ひとりが学びに向かい、
今と未来を“よく生きる”ことに
貢献することを目指しています。

ベネッセ教育総合研究所

編集後記

私は新人時代、1日の仕事の振り返りのために日誌を書かねばなりませんでしたが。当時は何を書いてよいかかわらず、時間もかかり、苦手意識がありました。園の若手の先生も日々の振り返りに対して同じ思いかもしれません。そのような先生がたに、振り返りのそもそもの意味や観点、明日への生かしかなどを伝えることで、毎日の振り返りが楽しくなるかもしれないと今号の取材で感じました。(橋村)

『これからの幼児教育』2015年春号

2015年2月4日発行

発行人 谷山和成
編集人 小泉和義
発行所 (株)ベネッセホールディングス
ベネッセ教育総合研究所
印刷製本 凸版印刷(株)
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 二宮良太
撮影協力 ヤマガチイッキ
イラスト協力 アサマリカ

お問い合わせ先

◎情報編集室
〒206-0033 東京都多摩市落合1-34
電話：042-311-3390
※本誌は最新号・バックナンバー等の追加発送は行っていません。すべての記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトからPDFでご覧いただけます。ぜひご利用ください。
<http://berd.benesse.jp/>

PDF版では裏表紙の写真は公開していません。ご了承ください。

表紙／裏表紙

東京都 ●
小日向台町幼稚園

『これからの幼児教育』刊行に寄せて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

次号は2015年7月上旬～中旬発刊(予定)です。